

作物名：いちご

病害虫名：萎黄病（病原：*Fusarium oxysporum*）

1 被害の特徴と診断のポイント

- 新葉の3小葉のうち1～2葉が小型化し、舟形のねじれた奇形となり、黄緑色を帯びる。奇形葉の発生は株の一方に片寄ることが多い（写真1）。
- 葉は光沢、生気を失って紅紫色を帯び萎凋し、株全体が枯死する症状とわい化する症状がある。低温時には被害の軽微な株では症状が消失する場合がある。
- 被害株のクラウン部、葉柄、果梗などの維管束部は褐変し、根の褐変腐敗がみられる（写真2）。
- 急性症状では、新葉の奇形や黄緑化を示すことなく、急激に萎凋から枯死に至る。



写真1 新葉の奇形化

2 伝染源・伝染方法

- 本病菌は土壌伝染と苗伝染によってまん延する。一般的に土壌伝染のほうが苗伝染より多い。
- 土壌伝染は本病菌の厚膜胞子が、土中で長期間（4～5年以上）生存して伝染源となり、根から侵入して発病する。
- 苗伝染は本病菌の菌糸が、罹病した親株からランナーの導管を経由して子苗に伝染し、発病または潜在感染となる。
- 無病地の汚染は、潜在感染株や汚染土壌の持ち込みによって起こる。汚染土壌の持ち込みは、トラクター等への付着による持ち込みや河川・水路からの流入などである。



写真2 クラウン部の導管褐変

3 発病しやすい条件

- 本病菌は糸状菌の一種で不完全菌類に属し、大型分生子、小型分生子及び厚膜胞子を形成する。菌の生育温度は8～36℃で、適温は28℃である。
- 本病菌はいちごのみを侵し、他の作物には寄生しない。
- 地温条件は、15℃以下では発病せず、15～20℃では発病しないか発病しても被害はごく軽く、25～30℃では激しく発病する。
- 土壌の過乾過湿の繰り返しや未分解有機物の多量施用は発生を助長する。

4 防除方法

- 発病後の対策はないので、作付け前のほ場準備、親株及び子苗の管理を徹底する。
- 親株は無病苗を使用するとともに、毎年更新する。
- 子苗は健全な親株から採苗する。
- 発病株は見つけしだいすみやかに抜き取り、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 発病ほ場では、作付け前に土壌くん蒸剤、太陽熱利用または土壌還元法による土壌消毒を行う。

（令和5年9月改訂）